資料１

地域検討会議【盛岡ブロック】(第２回)での主な意見等の概要

[H22.11.11:於岩手産業文化センター]

・　資料３において、1 学年の平均学級数及び１～３学級規模の学校割合の全国順位を大きい順に表す意味はどこにあるのか。大規模校がよくて、小規模校が悪いなどという評価はしないということでよいか。広い選択肢という考え方でよいのか。

・　資料３において、全国平均と比較する必要があるのか。本県と同じような過疎の県や面積の県との比較の資料を出すべきである。是非、岩手の高校教育を目指す姿について議論してもらいたい。

・　資料３において、地歴の科目の例が記述されているが、選択できない場合など２校で共有することができる余地はあるのか。例えば小規模校３校のうち１校に地理専門の教員を配置し、その教員が３校を担当するといった運用面での工夫があってもよいのではないか。

・　教員定数において、定数以上に確保することは許されないのか。財政が苦しいから再編を行うのか、地域のことを考えて再編を行うのか、明確な方向性を示してもらえれば、地域で話ができる。県の独自性を出してもらいたい。

・　教育･医療は、道路や橋とは違うという考え方であり、３学級以下の高校がある自治体は大きな課題である。小規模校にはメリット･デメリットはあるが、生徒や保護者が選択できるような教育環境をお願いしたい。

・　葛巻高校の要望として、定員に満たない場合は学区外１０％枠を弾力的な運用ができるようにお願いしたい。学級定員については、県として先取りする考えがあってもよいのではないか。教育にお金をつぎ込むよう、県議会において議論してもらいたい。

・　県として教育予算の圧縮の必要があるのか。もしそうであれば、市町村として財源要望を行っていきたい。

・　新聞の記事に「１学年３学級以下の学校を切り捨てはしない方針」と載っていたが、切り捨てはしないということでよいか。生徒減少はそのとおりであり、広域的な再編をどうするのか。

・　切り捨てはしないということであり、光明が見えた。財政当局がそれを許さないということはないのか。

・　小規模校の評価において、具体的な部分が見えてこない。尺度が県下一律の考えで動いているように感じる。県北地域には小規模校が点在している。通学の状況の資料によると、葛巻町から地区外の学校に行った場合は８０％が下宿である。この結果からも経済的な部分で高校教育を受けられない状況が出てくる。小規模校の抜本的な対策を示してもらうことが大事である。

・　紫波総合高校の現状として、地域との協力体制が見えてきた。地元の高校に進学する生徒は非常に少ない。進むべき道が地元にあるのか。教員の質に問題があり、低下してきていると感じている。教員は盛岡から紫波へということで都落ちした感をもっている。県教委では学力向上に努めているのか。盛岡の大規模校をどうするのかではなく、バランスを考えるべきである。財源が厳しいから減らすのではなく、県の学力をどうするかという観点から考えるべきである。

・　小規模校を維持していくことが大事だろう。現場の教員がどういう問題意識をもっているか。その資料がない。現場でどのような問題が出ているのか。

・　３学級と６学級では明らかに大きい方がよいということになる。一人の教員が２つの高校を兼務できるよう進めてほしい。部活については、生徒がやりたい部があるところに進めばよい。３年間１つの部で活動をしているのだから、部の数が少なくても支障はないと考える。

資料１

地域検討会議【岩手中部ブロック】(第2回)での主な意見等の概要

[H22.12.16:於花巻市文化会館]

・　西和賀高校の存続について、特段の配慮をお願いしたい。数による配置ではなく、地域の特性、歴史に配慮して欲しい。町内のバスの利用者は高校生が中心であり、高校がなくなると地元営業所がなくなるのは必至である。

・　今、高校再編を進めていくことが、県全体としてプラスになるのか。

・　大きい学校と同じ数の先生を小規模校に配置することは無理だと思うので、それを補うために、光ケーブルを使った授業ができないか。

・　小規模校がキャリア教育の見本になっていると思う。国との比較だけではなく、大規模校も小規模校も特色を生かした学校作りという考えがあってよいと思う。資料は３学級以下と４～６学級規模の学校の比較であり、小規模校を評価はするが大規模校でなければならないというように感じる。今後、地域の実情をどのように計画に反映していくのか。

・　北上市からも西和賀高校には毎年約３０名程度の生徒が通っており、必要な学校である。

・　理想としてはできるだけ望ましい規模で学ばせるべきであると思うが、現実的に岩手は広いので、理想通りにはいかないと思う。通学の実態を見ると交通手段がある地域の学校を選んでいる。子ども達は自分の将来を見越して学校を選び、その次には通える学校を選ぶ。旧花巻市や旧石鳥谷町を見るとその傾向が出ており、交通手段は大きな要素となっていると思う。その点において旧大迫町には交通手段が整備されているとは言えず、現実には近くにある高校が選択肢となる。この点をデリケートに考えていかないと配置については理解が得られないということもあると思う。

・　大迫高校にも西和賀高校にも地区外から通っている子どもがいる。これらの学校がなくなると、ここに通っている生徒達の受け入れ先はあるのかという話になる。それがなければなかなか進まないのではないか。通学に対する負担軽減も必要である。

・　小規模校のデメリットに対しての対策をとって、できるだけ存続させるという検討をしてはどうか。理想の形はあるべきだし、もっと先になればそういう形になっていくと思うが、頑張れる間はデメリットを解消するための対策を検討して欲しい。

・　岩手キャリア教育指針の定義は素晴らしいので、この趣旨を活かした教育を進めて欲しい。

・　西和賀高校の福祉情報コースの志願者が少ないのはなぜか。何とか充実できないものか。

・　西和賀高校の福祉情報コースにおいては、福祉関係資格のレベルが高くなってきているので、県に対しては普通科でということでお願いしている。

・　工業科を卒業した生徒が県外へ出ているケースが多いのはなぜか。成長産業を視野に入れた学科も必要ではないか。企業からは自社での教育を行うためには基礎学力が必要であるという点から、進学校の普通科に通っている生徒が欲しいと言われる。専門学科を多く作っていくのはどうなのかと感じる。

資料１

地域検討会議【胆江ブロック】(第2回)での主な意見等の概要

[H22.11.24:於奥州市水沢公民館]

・　全国において国の標準法を超えて、緩和した条件で学級定員を定めている都道府県はあるのか。
・　４０人未満を導入にしている場合、普通科や専門学科など学科によって違いはあるのか。
・　標準を４０人とした場合でも、定員の幅を認めているのか。
・　高校標準法が定められたのはいつごろか。
・　４０人以下学級を導入している県では、教員の配置についてどのような工夫をしているのか。
・　本県の非常勤講師の実態や非常勤講師が正規の教員になる割合を教えてほしい。
・　資料２Ｐ３の一番下に教職員の改善増や自然減など示されているが、この表の見方を教えてほしい。
・　義務教育では３５人学級が話題となっているが、高校の場合はそのような国の動きについて情報はないか。
・　資料２Ｐ２の加配教職員定数のところに少人数指導等の実施とあるが、この部分で加配できるのであれば議論の必要はない。５カ年計画で年間５２０人の改善増とあるが、岩手では何人増えるのか。
・　切磋琢磨はお互いに高め合うという意味であるという説明があったが、高校教育で切磋琢磨するための人数として１～３学級では適当ではないと考えているのか。様々な能力は、集団が大きいから身に付くのではなく、指導される中で身に付いて行くものであると思うので、馴染まないという感想である。
・　資料３Ｐ２の学習指導の現状についてのところで、就職希望者に対しての資格取得について、普通高校、専門高校を含めた全ての高校で取組をしていると捉えてよいのか。
・　高校再編で学校数を減らすことに同意するための会議ではないと認識している。岩手県として高校教育をどのように位置付けているのかという目的が見えてこない。学校・学科の配置は二次的なものだと思う。少子化の中、個性を如何にのばして行けるか､高校教育を如何に岩手県として提案できるかという部分に重点を置くべきである。
・　岩手県の高校生同士で切磋琢磨するということではなく、東アジアや世界と戦って行ける子どもたちを育てて行くという観点に立てば、議論の内容等が変わってくる。各学校らしさをこの１０年をかけて磨いていくという考え方からすれば、当地区にはたくさんの選択肢があり、再編や数に関わる論議であるならばナンセンスである。
・　就職についてはニーズに対する雇用の場があるのかどうか。
・　どのような岩手の子どもたちを育てたいのかという視点なくしてこのような論議をしていくと、効率だけを求めていくとしたらそれが本当に教育なのか。また、キャリア教育指針を具体化するとすれば高校を減らすことは相反する部分があるようにも読み取れる。１学年３学級を割り込むことがあっても、より具体的な人生設計を立てられるような選択肢の学校が数多くあるということは、岩手県の高校生にとっては非常にメリットが大きいのではないかと思う。
・　これからのニーズにはどういうものがあるのかということを確かめながら進めるこ

とが必要である。子どもたちがどのような学科を希望しているのか把握すべきである。胆江地区から他地区に出て行く子どもが多いが、胆江地区だけの話ではなくもっと広い範囲での議論をして行くべきである。

- 他地区への流出については住環境（住む地域）と関係が深いのではないか。個性にあった学校教育と言われているが、総合学科の校長は苦労している。生徒たちは地元の高校に通いたいので、奥州市全体で学科を考えて行かなければならない。総合学科もあるが、農業・商業高校もある。総合学科の系列と専門高校で学習内容が重なっており、整理できないものか。他地区の総合選択制高校は良くできている。
- 高校をどうするかという大きなビジョンがなければ同じ話し合いになる。当地区では高校再編に関してあまり悲壮感を感じていないと思う。どのような高校のビジョンをもって話し合えばよいのかを示していただいた方が、より深まるのではないかと感じる。

資料１

地域検討会議【両磐ブロック】(第2回)での主な意見等の概要

[H22.11.16:於一関地区合同庁舎]

・　小中学校の実態から見れば、小学校における児童４０人を教員１人で指導することは無理ではないかと受け止めている。授業を見せていただくと中学校でも４０人は多いと感じる。高校において、一斉授業４０人に対して学校現場ではどのような声が上がっているのか。

・　資料３によると、１～３学級規模の学校割合が全国４６位とある。岩手県は北海道についで広い県であり、人口も分散している。将来的にわたって全国平均程度になることは有り得ない。岩手の特徴と捉えた中で、分析し整備をして行くべきである。

・　資料３によると、同じ普通科であっても、規模によって履習できる科目に差があるということでよろしいか。

・　資料３について、全国との比較をどういう意味で示したのか。４６位は誇れる数であると思う。

・　高校卒業後、普通科の生徒は管内に就職し、地元に残る。一方で、進学校の生徒は地元に残らなくなるとの地域の方々から悩みや嘆きが聞こえる。

・　病院では、大規模な病院から小規模な病院へ職員を派遣する形を取っている。学級数が減少していく中、学校間で教員が行き来できる方法はできないものか。

・　小規模校は大きな役割を果たしており、学校の役割分担と工夫が必要である。公共交通機関が縮減され、通学が厳しくなって行く。地域内の学校を継続させて行けるような工夫をお願いしたい。

・　両磐地域は自動車関連企業の集積を目指しており、一関工業高校に機械科及び専攻科が必要である。また、一関二高は福祉関係の系列があり、特色をもった学校であれば、生徒減も関係ない。さらに、宮城県北の生徒を集めることも必要である。

・　就職の内訳を見ると、農業科において、農林業に就いた生徒がいない。学科と将来の就職がどのようにリンクしているのか。時代も変化して行く中で、学科・科目の設定と就職との関わりを大事にしながら検討すべきである。

・　大学進学後どのような系列の仕事についているのか。大学を卒業しても就職難である。中学校の段階から将来の仕事について道筋を示すことができればよいと考え、ＰＴＡ主催で就職ガイダンスを実施することとしている。親を集めてキャリア教育の一端を担うことができればと思っている。

・　一関工業高校の機械科及び専攻科の設置について、熱心に取組んでいただいている

が、すんなり実現できる仕組みも難しいと考える。工業高校では、ＣＡＤや機械について学習しており、千厩高校の産業技術科も同様なカリキュラムになっている。そのことを踏まえ、二つの学校を併せ、セットにした専攻科を設置するという視点で検討できないものか。

・　１学級定員については、岩手方式で２０人にするとか、思い切った発想も必要ではないか。中学生の学力については、基本的に最低限をクリアできるよう指導して参りたい。

資料１

地域検討会議【気仙ブロック】(第２回)での主な意見等の概要

[H22.11.17:於大船渡地区合同庁舎]

・　住田町の中高一貫教育については、教員の加配が難しいのであれば、学校を全てまとめることにより、教師を集中配置し、専門的な教育を６年間行うことができるのではないかと考えたものである。エリート教育とは別の次代の地域を担うリーダーを育てるモデルと考えている。新たな附属中学の開設については、一関一高の成果を見てからという説明があるが、他県を含めれば多数のケースがあるので、その実績を参考にしてはどうか。

・　県の独自の判断で少人数教育を実施することは可能か。

・　１０年後の少子化の状況を見越して、県教委として県立高校をどうしたいのか、考え方は無いのか。

・　学級定員に係る少人数化について、文部科学省では計画は無いのか。

・　気仙ブロックにおける現行の学校配置は理想的である。少子化とともに生徒、保護者の求めが多様化している。それに対して柔軟な対応が必要となる。公的な縛りの中で定員の少人数化は難しいが、知恵を出し合い、ブロックに教員を配置するというような工夫をお願いしたい。

・　学校の削減以外に何か方策が無いものか。管外や県外まで広く生徒募集を行ったことはあるのか。

・　当地区における教育に求めるものが明確であれば良いが、国の政策に合わせてやってきたきらいがある。グローバルな経済の動向を先取りしながら教育が動いていかないと世界に負けてしまう。そのためには、学科の内容を見ながら我々も検討していかなくてはならない。第一次産業の衰退の状況や今後、それを盛り返す方策など、情報を得ながら教育を考えていく必要がある。

・　学校の位置の関係もあるかもしれないが、横田中学校の生徒は普通科志望が多い。他地区よりも高い印象である。

・　最終的には、教育に金を惜しんではいけない。金を前提として教育をするのではなく、教育のためには金をつぎ込むという姿勢を持ってほしい。

・　規制があって駄目だけど意見を出してほしいということではなく、県教委の意見も出しながら全員の知恵を出し合うという形ではないとなかなか本論に入っていかないのではないか。

資料１

地域検討会議【釜石・遠野ブロック】(第２回)での主な意見等の概要

[H22.12.22:於釜石地区合同庁舎]

・　基本的方向には、標準より学級定員を少なくした場合における学習指導への影響を考慮とあるが、40 人より少なくした場合のデメリットを説明して欲しい。

・　県立高校において、発達障害等を抱える生徒の割合とそれに対応した教員の配置の状況はどうなっているか。

・　釜石市では、今後 10 年間を見通した第 6 次総合計画を策定するため市民の意見を集めているが、雇用の場の確保が一番多い意見である。従って、産業振興とそのための優秀な人材の確保が必要であり、地域毎に地域の特性を生かした個性的な高校の配置が必要である。これが、例えば専攻科であったり少人数教育であったりすると思う。

・　地域から学校や学科がなくなることにより、地域偏在が広がり、格差拡大が懸念される。学校規模に固執することなく地域に学校を残す工夫をお願いしたい。センター試験の成績といった岩手の学力の実態を考えると学級定員よりキャリア教育という中教審の提言については、そうではなく両方を求めるべきだと考える。先駆けて少人数数教育を推進して欲しい。

・　高校にも特別支援学級の設置が必要と考える。

・　遠野地域では、他地域に流れるという傾向があり、情報が十分伝わっていない実態もあると思う。情報交換や交流を図り、地域の高校で育てあげるということが大切である。

・　１学年３学級以下の小規模校の評価について説明があったが、地域のかかわり等、良い面には大槌高校は該当するものと実感している。

・　釜石市における今年の新生児数は 200 人であり、15 年後において、その子たちが高校生活にどのような夢や希望を持って入るか念頭に置いて考えなければならない。そのためにもっと各学校に特色を持たせてほしい。例えば、釜石でひとつの高校にし、校舎制も視野に入れながら総合高校として多数のコースを設置し、子供たちのやりたい希望が叶うことができるような学校にしてはどうか。

・　現在、定時制高校において三修制等、先進的な取り組みを進めているが、卒業後の出口についての支援がもっとあると良い。

・　学級定員 40 人について普通高校と専門高校を分けて考えてよいと思う。

・　本県は地域が広いが、それぞれの地域における基幹産業になるべきとこころを外さないようにする必要性がある。遠野であれば緑峰高校の農業は人数が少なくなっても

維持するべきではないか。全県では農業高校はどこに必要なのか全体的に考えた上で、人数が少なくても本県の状況を踏まえて維持するべきだと思う。

・　１学級定員が 50 人から 45 人、40 人にしてきた理由は何か。

・　定員が少ないほうが教えやすいということだと思うが、現在、学力の低下がみられることから、本県では少人数を推進し、教員を減らさないということは可能なのか。

・　秋田県は少人数教育を進め、学力がよいと言われているが、国から言われたことばかりだけではなく、本県の考えとして少人数教育を実施すれば学力向上につながるという方向に持っていけばいいのではないか。

・　遠野地区からは約 160 人の生徒が花巻や釜石等の地区外に通学しているが、なぜ出ていくのか中学校の先生に伺いたい。

・　企業側から見ると、今は貧弱な子供たちが多い。勉強ができるからというだけでは採用できない。体ができていて、面接が良い子のほうが、学力が高い子よりもいい場合がある。また、勉強が悪くて体力もないという人が多い。学力も重要であるが、それ以外の面の指導や育成についても考えて欲しい。

・　高校は、義務教育と違って選ばれる学校でなければならない。保護者の都合で学校を配置しても保護者や生徒に支持されなければその学校は廃れていく。そのためには、校長が選ばれる学校づくりをできるようなシステムを考えなければならない。

・　地域の事情を考慮したり、地域の意見を聞かなければならないのはわかるが、地域の活力よりも学校の活力を優先するべきだと思う。

・　意見を聞くという姿勢は大切だが、教育委員会はサンドバックになって調整するところは調整して、信念を持ってこういう方向で行きたいというプランを提案していただきたいと思う。

・　釜石に関しては、２校をどうしても残さなくてはならないとは思わない。どんどん小さくなって魅力のない高校になるのであれば、釜石高校と釜石商工高校が早く統合し、立派な校舎を建てて、釜石総合高校としてもよい。その場合は、最低１割は不合格者を出して欲しい。全員入るような高校はやめて欲しい。特進クラスを作れば盛岡一高に行くような生徒は帰ってくるし、就職クラスを設置してもよい。そういう大学みたいな高校を作って欲しい。

資料１

地域検討会議【宮古ブロック】(第2回)での主な意見等の概要

[H22.11.22:於宮古地区合同庁舎]

・　資料2(3)において、加配教職員定数とあるが、文科省はこのような表現を使っているのか。全国でH23年度に520人の加配となると本県は5人ぐらいか。

・　資料3のP2において、専門分野の教員数によって、科目設定が違ってくる理由はなにか。年度によっても履修科目が変わるのか。小規模校はますます質的に落ちていって、募集定員を満たさなくなることが懸念されるが、なんとか手立てを講じてほしい。

・　県教委は県の高校教育をどのように考えているのか見えないが、すぐに学科をどうするかの議論に入ろうとするところがある。宮古地区は普通科、専門学科のバランスがうまくとれているが、再編をするのはいかがなものか。資料3の3学級以下の学校の評価は解せない。比較しても仕様がないと考える。宮古北高校を見ると、来年度1学級になり、H28年度1.10学級では不合格の生徒も出る。H22年度は不合格者が6人もいた。受検した人数は40人を超えていたにもかかわらず、学級減を行ったことに対して納得がいかない。

・　岩泉町として要望書を提出した。今回の資料は当町の実態がよくわかる資料である。7割が岩泉高校に進学しており、地域性を考慮すると帰着する結果である。岩泉高校は分校を配置し教育活動を展開してきたが、分校が廃校になり本校のみとなった。高校の存続は地域にとって大きな課題である。

・　宮古市長の意見と基本的な部分では賛成するところはある。教育の根幹はデータだけで計れるものではない。山田高校は町立高校のような思いで支援を行ってきた。大会出場の一部旅費の補助、海外との交流、中高連携教育の推進などを行っている。また、地域の有志による支援組織をつくり様々な活動をしており、情報の共有や部活動の支援の検討を行っている。町の将来を考えたとき、若者をどう参加させるか。高校生がイベントの参加や福祉関係のボランティアなど取組んでいる。高校が消えることは、町の消費に大きな影響があり、町づくりにとって大きな痛手になる。また、地元の高校の有無はキャリア教育にも違いが出てくる。単に数字を比較しながら4学級以上が望ましいというのではなく、地域性があってよいと考える。県北･沿岸振興の視点からも考えるべきである。

・　岩泉から3割の生徒が外へ出ている。農林業が重要な産業であり、宮古地区に農林を学ぶところがなく、宮古外の学校で学ばざるを得ない。宮古広域の中で育てることはできないか。県内における中長期的な見通しを聞きたい。岩泉高校は寮を抱えているが、寮の機能を生かすため、正規職員や支援員などの配置をお願いしたい。

・　ブロック内の学校配置について、9ブロックは賛成である。宮古ブロックは、普通科が多すぎるのではないか。農林業に関する学科はどうしても必要ではないか。設置することで、バランスのとれた学科配置となる。担い手を育成する学科ができればよいと考える。

・　普通科高校が多いとの意見があったが、地域性から考えると、普通科高校は大事である。山田高校や岩泉高校では、普通科であるが職業科目を学習している。宮古市内において、進学校、専門高校、普通科でも進学だけではない学校も必要である。学校規模が小さくても、今の形で存続させてほしい。

・　公共の施設の配置を考えながら検討すべきである。釜石商業高校の統合に伴って三陸鉄道が影響を受けており、宮古北高校がなくなると三陸鉄道が潰れる。全体像を作って配置を考えるべきである。宮古病院や久慈病院の場所が悪く、宮古北高校を存続してほしい。国を挙げて観光振興を図っているが、観光学科がないのが残念である。人材育成のなかで、観光に関する人材の育成がない。

・　構想をきちんと決め、生徒に不安を与えず、保護者等へ説明をしてもらいたい。本校の生徒の 6 割が普通高校を志望している。また、85%が宮古市内、15%が盛岡を志望している。盛岡を志望している内容として、スポーツ、文化の面での進路選択である。

・　広大な県土で交通の便もよくない。第一次産業の後継者不足が言われており、県の行政との連携が必要である。

・　山田高校は、地域における中高連携が優れており、手作りの教育ができる。進学と就職が半々であり、小学生の段階から将来の進路を見据えた指導を行っている。高校での進路指導にあたっては、工夫した手立てを講ずることで対応している。また、祭りに参加するなど、故郷を大切にする高校生の姿を中学生が見ている。

・　専門学科において、高等教育機関への進学に取組むとあり、進学に力を入れているようである。資料 4 によると、就職 41%、うち管内が 37%であり、就職指導に力を入れてもらいたい。職業教育の充実が重要であり、キャリア教育を充実させ、正社員化を進めている。ジョブカード制度を廃止しているようだが、技能を身に付けている方を採用したい。

資料１

地域検討会議【久慈ブロック】(第２回)での主な意見等の概要

[H22.12.9:於久慈地区合同庁舎]

・　高校標準法が制定された時期と現在とでは、情勢が変わってきているはずである。今の時代にあったものに考え直すべきではないか。

・　現在の教育改革の流れは、「市町村あるいは学校現場の実情を考えて」という流れになっていると思う。岩手県教委では、国の考えを丸呑みするのではなく、県独自の考えで岩手の高校教育をこのようにするのだという考えを持つ可能性はないか。

・　県で大きなビジョンを示し、県民が納得して応援すれば財政部局も動かすことができると思う。頑張ってほしい。

・　不登校生徒数の大規模校と小規模校の割合があれば示してほしい。

・　グローバル化する社会を生き抜く子どもたちにとって、国際的な感覚を磨く学科等が少ないのではないか。

・　第１次の高校再編における目的や達成度などの評価はどのようになっているのかについて説明してほしい。

・　「進学に対応するのであれば５学級は必要」という話だが、これは学級数が問題なのではなく、先生の数の基準の問題ではないだろうか。

・　小規模校のよさがもっと資料に出てよいのではないか。

・　６割の子どもたちが「授業がよくわからない」と回答している中で、このまま４０人学級で行くことが本当によいのだろうか。教育を経営、効率で考えてはだめではないか。

・　「小規模になるとデメリットがある」ということを承知の上で、地域がそのデメリットを上回る応援、結束のもと、デメリットまでも引き受けて存続を願うということであれば、ぎりぎりまで存続してよいのではないか。統合整理の場合は、充分に地域と話し合いを行いながら進めてほしい。

・　５年を見通した推計値の提示があったが、八戸南高校の募集停止を考慮しているかについて伺いたい。

・　地域の意見を充分に考慮して考えてほしい。久慈工業では土木、建築業界に人材を輩出してきた。種市高校の海洋開発科も同じである。

・　通学距離が伸びることへの配慮をお願いしたい。例えば大野高校がなくなった場合、大野の子どもたちはどうなるのだろうか。

・　高校全入を前提として今後考えてほしい。義務教育でも多様な子どもたちを受け持っている。特別な支援が必要な生徒、発達障害等の子どもたちも、全て高校進学を希望している。どちらかといえば、本地区ではそのような生徒は、小規模校にお世話になっている例が多い。

・　地域の産業に貢献できる人材を育成していただきたい。

・　お金の問題ではない。「若い人をどのように育成していくか」というように、視点を変えて考えてみてはどうだろうか。

・　学校の統廃合によって生徒を動かすのではなく、教師を動かしてほしい。そのような方法はないものだろうか。

資料１

地域検討会議【二戸ブロック】(第２回)での主な意見等の概要

[H22.11.25:於二戸地区合同庁舎]

・　高校標準法、教職員の適正配置に関する法律等については、その通りであると思うが、各ブロックの検討会議等で１学級定員の少人数化に対しての意見が出ているようである。高校における３５人学級の導入について、国に先駆けて岩手県で検討してほしい。また、全県一律の導入が難しいのであれば、小規模校から導入し、その後全県に広めるといった方法についても検討してほしい。３５人学級を導入した場合における財政負担等の試算があれば示してほしい。

・　小規模校になるとカリキュラム等の関係で教育の質が落ちるのではないかという心配があることは理解した。しかし、少年期はまだまだ不安定な時期である。親元から地元の高校に通わせたいと思っている保護者も多いと聞いている。全員が全員エリートでなくてもよい。各校特色ある教育を行ってほしい。教員確保についても、非常勤講師、退職した方々の再雇用等の方法もあるのではないか。

・　「高校は各市町村に１校」ということを考えてほしい。それぞれの高校が、それぞれの地区で特色ある教育に取り組んでいる。地域にとってかけがえのない高校を、今後もぜひ育てていただきたい。また、高校標準法のただし書きについて、設置者の県教育委員会の判断で取り組んでほしい。財政負担が生じるとは思うが、ぜひ知事部局と協議して、必要な財源を確保してほしい。

・　子どもたちが、どこにいてもあたりまえの教育を受けられるような環境を整えてほしい。「子どもが減ったために先生が配置できない」という制度であれば、それは制度自体が間違っていると思う。子どもの選択の自由もあるが、「地元で勉強したい」という子どもたちにとっては、地元で手厚い教育を行えるようにしてほしい。

・　小学校、中学校の再編も進み、今までできなかったクラブ活動やＰＴＡ活動ができるようになったのは事実である。高校再編に関わっては、ある一定の基準、線引きが必要であると思う。また、地元高校を最後まで残す努力も必要であると思う。地域産業等との関係もあるので、少子化・学校再編・産業振興が同時に議論されることを望む。

・　小規模になることで部活の数が減ることはわかるが、各高校で特色ある部活動を存続していれば、それを目的に進学する生徒もいるのではないだろうか。また、自分でやりたい部活動、競技等があれば、それを目的に他地区の高校へ進学する生徒もいる。最後は子どもの選択であり、親としては子どもの選択を応援せざるを得ないが、できれば地域に１校は高校を残していく必要があると思う。

・　現実的な話をすれば、福岡高校の学級数を減らせば他の高校はそれなりの学級数が維持できると思う。「分け合う」という考えもある。本当に県北の各地区が融和して、各市町村１校を維持していくためには、そのような考え方も必要である。高校再編に

関わっては現実を直視するべきであると思う。

・　各地区に１校は高校が必要である。子どもに高等教育を受けるチャンスを与えるのは、これから先の国に対する投資である。我々の今のために子どもたちに教育をするのではない。３０年後に今の子どもたちが国・地域を背負うためには、今お金をかけなければならない。そのためには、小規模になっても各地域に高校は必要である。ただ、競争が激しい中核校も必要である。その中で切磋琢磨することで、もっとレベルの高い子どもたちが出てくるはずである。各地域に小規模でもよいから高校は残すことと、中核校を存続させることの両方が必要であると思う。

・　学校教育の１つの柱は集団教育である。その中で切磋琢磨するためには、ある一定規模の高校、学級数は必要である。３５人学級か４０人学級かについてであるが、他地区でも「盛岡は４０人学級、沿岸県北は３５人」という意見が出ている。最後は、県教委として県単でつける覚悟があるかというところにつきるのではないだろうか。今後は具体的な提案を出していただき、それを基に検討する段階ではないかと思う。

・　どこの地域に生まれ育っても､能力が開花できるように教育環境を整備してほしい。それが地域の振興にもつながっていると思う。また特色ある学校づくりに取り組み、一定の成果を上げてきた学校もある。そのような流れが途切れることのないようにしてほしい。

・　生徒の数によって教員の配置がきまるのは一つの原則であるが、少子化が進む地域においては、県で考えている特別な配慮を、もっと公に出していただきたい。狭い地域の中で、お互いに疑心暗鬼になっている状況も生まれてしまう。

・　他県の情報について知っていることは、もっと出していただきたい。全県的視野に立った高校の再編計画をお願いしたい。